

この街で



注:この広報誌は、地域の皆さんを対象としています。

第19号

発行日 平成17年 12月9日(金)
発行 サポートセンター径 広報係
〒 247-0034 横浜市栄区桂台中 4-5
TEL045-897-1101 fax1119

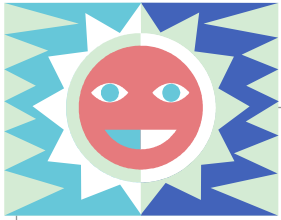
秋の1泊旅行



伊豆下田にて

- ◆P1 表紙 / 目次
- ◆P2、3 『デイサービス事業』
- ◆P4、5 『生活支援事業』
- ◆P6 『相談支援事業』
- ◆P7 『私の宝箱』『小祝貴史の祝つとこ』

- ◆P6 『径の助っ人紹介します』
- ◆P9 『にんにくの視線』
- ◆P10 お知らせ
『バザー御礼』
『編集後記』



デイサービス事業

みなさんこんにちは、今回は受注2班でアルミ缶のリサイクル活動に励む中山敦司さんの日中活動について報告します。

◆ 中山さんは現在32歳、径が開所当初の7年前から利用されています。これまで中山さんがやりがいを持って行える作業や余暇などの活動を模索してきましたが不快そうな声を出しながら歩き回ることが多く、中山さんの気持ちを汲み取ることができない日々が続きました。時には径から飛び出していなくなってしまったこともあり、部屋の中だけの作業になりがちでした。

◆ こうした日々が中山さんの望む活動なのだろうかと疑問を持つようになりました。外が大好きな中山さんが生き生きと地域の中で活動している姿を思い描き、アルミ缶回収にチャレンジ。始めは同行する職員を限定し、必ず手をつないで回収に行きました。果たして上手くいくのだろうか？そんな職員の心配をよそに2週間ほどで回収先の玄関に出されている袋を進んでカゴに入れる中山さんの姿がありました。回収を行うようになってから今まで行っていた屋内作業でも集中力が増しはじめ、我々も中山さんの充実度に実感が持てるようになり、その可能性にワクワクする感覚を覚え始めました。

◆ 「本人の意思を尊重」した活動でなければ、我々支援者もいずれ行き詰ってしまう事、反対に「好きなこと」「やりたいこと」が存分に組み込まれている活動は例え時間がかかったとしても本人の「主体性」に繋がっていくということでした。

自分以外の人のお気持ちを明確に理解することは決してたやすいことではないからこそ、家族に次いで共に過ごす時間の多い我々支援者にはこういった内面的な部分に対しての「想像力」「実行力」が最も重要であるということを改めて教えられた気がします。

◆ 現在、毎日この地域を回収カゴ片手に颯爽とみんなの先頭を歩いています。中山さんが歩くこの先の道のりを「想像力」と「実行力」で一緒に切り開いていきましょう。

「よろしくお願ひします、敦司さん！」



勝俣篤志



やってるデイ!

アルミ缶回収BOX

回収BOX、看板リニューアル!!

私達はアルミ缶の回収とプレスを中心に活動を行っているリサイクルグループです。径が開所した頃は地域のお宅に協力して頂きアルミ缶を集めていました。それが今ではスポーツ広場・桂台小学校・バス停と3箇所にも回収BOXを置かせて頂き、毎日沢山のアルミ缶を入れて頂いています。特にバス停の回収率は高くBOXを2個に増やすという嬉しい結果になっています。バスを利用するさいにご自宅から持ってきて下さったり、直接手渡しで『いつもご苦労様』と声をかけて頂いたり私達にとっては仕事をする上で何よりの励みになります。地域の方々に協力してもらい、自分達の仕事が理解されている。『よーし!これからもがんばるぞ!!』という意欲が湧いてきます。さて、このBOXも看板を含めだいぶ古くなってきたので、この度リニューアルいたしました。桂台小学校の児童達にステキなポスターを描いてもらい皆で作上げた看板です。缶を入れるさいに目を止めて頂けたら嬉しいです。『いつもありがとうございます。そしてこれからも宜しくお願いします。』そんな皆の願いをがこもった看板です。

長谷川敏子



これが目印です⇒



竹炭ニュース



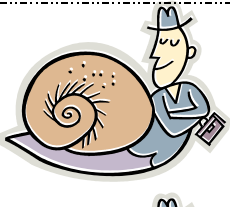
リニューアル!! 竹炭消臭ポット

この度竹炭消臭ポット、容器を新たにリニューアルしました。ガラスの瓶から井草や藤などのかごを使うことにより、軽くて通気性がよく、壊れる心配が無く重ねやすいという利点があり、お客様から好評を博しています。

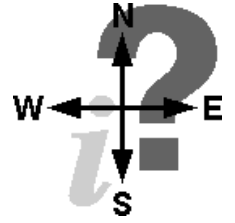
はじめは消臭ポットの容器を買いに行った時、ほとんどのメンバーがカートにガラス瓶を入れている中、一人だけ井草のかごを入れた人がいました。試しにかごで作って見たら、見た目が素敵でとても軽い消臭ポットが出来上がりました。これを径内で売り始めたところ、お買いになった方の口から評判が広がり、今に至っています。素敵だけでなく、狭い空間の消臭、除湿もできる消臭ポット。ぜひお一ついかがでしょうか。



1個 250円
径の館内で販売しております



生活支援事業



今年の夏も暑かったあ！！～夏プログラムを終えて～



生活支援事業における最大のイベント「夏プログラム」がおわり3ヶ月が経とうとしています。若い職員に負けるなという意気込みで年甲斐もなく張り切った代償もありましたが、先日ようやく夏休みを頂き孫の運動会に行ったりして身も心もリフレッシュできました。孫との時間では、あっ！そんな話ではなくて、今回は私の心に残る則之君についてレポートさせていただきます。

関則之君は個別支援級5年生。径では一時ケアを中心に利用されている方で、電車やバスが大好きな男の子です。今回夏プログラムは「江ノ島水族館外出」「江ノ電に乗って鎌倉散策」の2つに参加されました。

1回目は江ノ島水族館へ車で外出しました。何回か径のプログラムに参加していると思いきや、径で参加するのは初めてだったことを、あろう事か当日の朝に気がつきました。事前準備や情報が足りなかったことは否めませんが、きっと水族館を見れば笑顔を見せてくれるだろうと…少々強引ではありましたが楽しんでもらうことを期待して出発することになりました。

不安と期待の中で、本人にとって初めての外出。水族館に行こう！楽しいよ！と皆で盛り上げましたが、則之君の不安を緩和するにはいたりませんでした。それでもなんとか水族館に到着することができましたが、暑さ、人の多さで待ち時間もあり、結局水族館を楽しむことはできず、我々もなだめながら径に戻ることにしかできませんでした。せっかく期待して径に来てくれたのに、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

暑さと人の多さは仕方ないけれど、事前に配慮できる事はいくつかあったはずではないか…今回の件は、本人への関わり方や苦手な状況はどのような事なのか？事前情報不足でありました。また、本人にとって次に何をするのかわかりづらい内容だったので不安を抱かせてしまったとも考えました。そして何よりも半ば強引に連れだしてしまったので、今後、径が嫌いになってしまわないか不安になりました。

今回の出来事をこのように振り返り反省した上で、次回参加予定の外出プログラム楽しんで帰ってもらいたい！！という思いで事前準備に取り掛かりました。当日の流れがわかるようにスケジュール表と次に乗る乗り物カードを作成したり、極力待たないで乗り継ぎできるダイヤを調べたり、また実際自分でコースを回ったり…そんな気持ちばかり急ぐ私に現場の職員も協力してくれて、いよいよ2回目のプログラム当日を迎えました。

2回目は公共機関に乗って鎌倉まで行く内容。集合は径ではわかりづらいので、あえて出発地点のバス停にしました。前回は何をするかわからない状況のままの参加だったので、本人が1日の流れがわかり、見通しがつくように当日のスケジュールを用意しました。またこのプログラムは色々な公共手段を使って鎌倉までいくという内容なので、次に乗る公共機関の写真をカードにして伝えていこうと考えました。

バスの乗車前はお母さんと別れる事に不安があった則之君ではありますが、バスの中では「あのバスは江ノ電かなあ!？」「あのバス港南台行きだねえ!」っていうように楽しそうにお話しているのが印象的でした。次はモノレールで江ノ島までいきましたが、ホームでは出発前の電車の車体番号を読みあげたり、好きな車両は出発するまで熱心に眺めるといった意外な電車通ぶりに我々も感心させられました。

このような配慮で苦手と思われる乗り継ぎや待ち時間もスムーズに移動でき、無事江ノ島で昼食を摂ることができました。本日より一番のビューポイント江ノ電での車窓からは夏の賑わいをみせる由比ガ浜海岸の景色を思う存分満喫できた様子で、我々はホッと胸を撫で下ろしました。

～私は則之君が待ち時間や不安になった時、気持ちを切り替えるきっかけとなればと思い飴や電車の本などを忍ばせていましたが……いらぬ心配だったようです～



これまで、夏プログラムが家族のサポートだけではなく、本人のステップアップ、スタッフ側の新たな発見に繋がっていることを実感してきました。今年は昨年以上に多様なニーズを受止めていきたいと考え、混雑は覚悟で外出プログラムも多く取り入れました。行楽地の人の多さや渋滞によるハプニングはありましたが、屋内中心で行う普段の一時ケアでは気づけなかった一面を数多く発見できた事で、今後の利用においてのヒントを得ることができたと考えております。また外出プログラムを通じて、地域に出た時に感じるまわりの空気や暖かいまなざしに感激する一方で、冷たい視線や構造的に使いつらい公共施設や駅を肌で感じてきて、当事者が普段感じている気持ちを改めて見つめなおすきっかけにもなった夏でもありました。

福岡栄子

夏の思い出



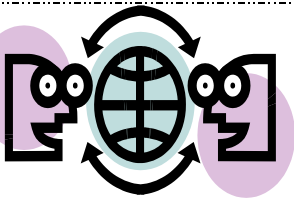
お好み焼き
上手に出来
たよ～!



プールのあとの
カレーは格
別だね!!



トーマスもいい
けどシーバスも
いいなあ



相談支援事業



～細井道子さんを偲んで～

電動車椅子をあごで操作して、颯爽と金曜日に徑にいらしていた南区の細井道子さんが、9月17日の朝、亡くなりました。8月末に4ヶ月ぶりに病院から自宅に戻ってこられてわずか2週間後の事でした。道子さんは55歳、HAMという脊髄性の病気でした。

同じ病気のお母さんを看取り、東京に出てきてご主人と巡り合い、その後ALSを発病されたご主人を大勢のボランティアさんと支え、見送られました。やがて自分も四肢が思うように動かなくなり、ご自慢の電動車椅子をあごで操作しながら、ご主人の思い出がいっぱいつまった、南区の自宅でたった一人で生活されていました。

元気な頃の道子さんは、生活や、環境にこだわり、タオルのたたみかた、洗い物の仕方、料理の材料一つ一つに細かく指示を出し、自分らしく生活をされていました。月に300時間以上もヘルパー派遣を受けながらの、頑固な1人暮らしはあきれられるほどあつぱれでした。鼻から管を入れ、酸素を吸うようになってからも、そのこだわりは変わりませんでした。ほんとうに「わがままなみっちゃん」だと言いながらも皆、なんだかんだと顔を見せてくれたようです。近所の方達も、毎週卵を持ってきてくれる人、御惣菜を届けてくれる人、ご飯を炊いてきてくれる人、いろんな方達の気持ちを彼女は「ありがとう」と天真爛漫に受け止めているようにみえました。

そんな道子さんでも、最後の入院前位から厳しくなってきました。1人暮らしを続けるだけの体力、気力が無くなって来たのです。今までの気丈すぎて、全て、道子さんの指示通りに動いてきたヘルパーさん達の戸惑い、このまま見てはられない、と遂に入院となりました。3ヶ月以上に及んだ入院中、幾度か入所を勧められましたが、決して首をたてには振りませんでした。彼女は、自分で描いたシナリオどおり、自宅での生活を全うしたかったのでしょう。

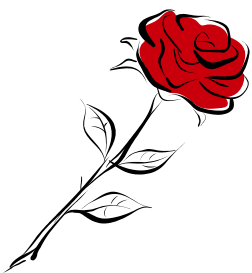
9月1日に退院し、徑にも何度か顔を見せてはくれましたが、以前のような屈託のない明るさはありませんでした。最後の16日は不思議なほどいろんな方達に会った一日でした。そして夕方、「じゃまたね。あんまり無理しないでね」と別れ、その18時間後には冷たくなった道子さんとお会いする羽目になってしまいました。突然すぎるお別れに茫然として涙も出ませんでした。いろんな複雑な思いが、私だけでなく親しかった人達の胸を騒がせたことでしょう。

今度のことでは、一人暮らしの人を支える事の難しさ、心もとなさを痛感しました。

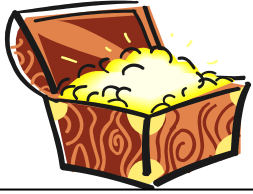
お通夜や告別式には本当に教会に入りきれない人達が外にあふれていました。今、ご主人と一緒に教会に静かに眠っておられるそうです。

さようなら道子さん、お疲れ様。

口野たか子



細井さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます
訪問の家職員一同



私の宝箱



先日、両親と中伊豆まで紅葉をみに行った。修善寺に着いたのは夕方、少し暗くなり始めていたが、山門では色づき始めた紅葉が迎えてくれた。まだ色を深める途中の枝ぶりをみて、父は「このぐらいが好きなんだ。」とシャッターを切った。陽が落ちてきたので帰ろうとすると、辺りに夕刻の鐘の音が響いた。母は「(当時の夏目) 漱石と同じ音を聴けた。」と嬉しそうだ。

僕が幼い頃、母は昔話や小説をよく語り聞かせた。『ジキル博士とハイド氏』では、博士が薬を飲むシーンを実演して見せてくれた。その後、原作も読んだはずだが、今では母のグラスを傾けた仕草が胸に残っている。きっと沢山の物語が、僕のなかに潜んでいるのだろうと思う。

両親と旅行に行くのは、実家を出てから初めてだった。本を読む時間が大切だったり、写真や絵から関心が離れないなど、今の自分につながる一つひとつの体験を思い出していた。

二人にはどうやってよいか判らず伝えられなかったけれど、感謝した日だった。

浅沼 太郎



小祝貴史の祝っところー！！

小祝貴史の祝っところー！！第3回目は12月22日生まれのワンデーサービスの重矢真子さんです。径には月曜日と水曜日に通所されています。普段の重矢さんは、レザークラフトのペットボトルホルダーをととても上手に作ったり、みんなのお手伝いでコップを洗ったりしてくれるとても女性らしい方です。お誕生日のインタビューに行くと、部屋のソファーに座り満面の笑みで迎えてくれました。それでは、重矢さんに質問してみましょう！

お誕生日がきたら何歳になるのですか？の問いに「ん〜、29歳！」と元気に答えてくれました。が、あれ？重矢さん・・・今年で・・・本当は何歳ですか？まあまあ・・・女性に年齢は聞いちゃダメですよ☆そんなおちゃめな重矢さん、お誕生日を迎えたら「外で外食をしたい！」との事でした。



小祝貴史
橋本亜矢子
インタビューの様子⇒



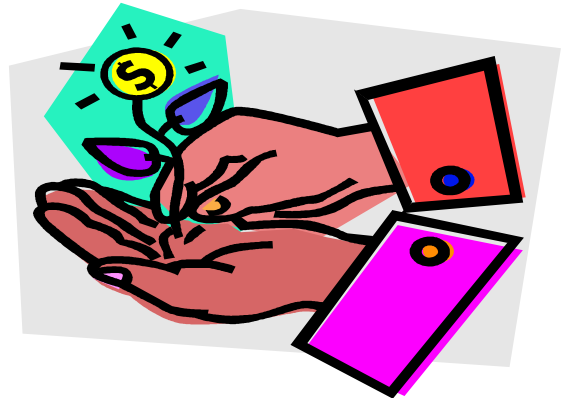
径の助っ人紹介しまーす!

ボランティアさん編

今回は毎週木曜日にゆめでお手伝いに来て頂いている西村さんをご紹介します。西村さんは今年の6月からほとんど毎回のようにお手伝いに来てくれています。ボランティアさんの中でも唯一の男性でみんなから頼りにされています。また、利用者さんからも絶大な人気があり、「今日、西村さん来るの?」とか「西村さんは?」とよく聞かれます。西村さんがゆめに来ると「西村さんこんにちは!」「西村さんよろしくお願ひします!」と声をかけるといつも「よろしく!」と温かく優しい表情で言葉を返してくれます。普段はみんなと楽しくパン作りをしています。時々1人の利用者さんとゆったり過ごしてもらうこともあります。つい先日も小祝さんと一緒にマッサージ笑顔で優しく声をかけ温かみのある大きな手に小祝さんもリラックス。二人の間にはゆったりとした時間が流れ、その姿を見ていた周囲の人々もその雰囲気になやまされました。

暖かく頼れるお父さん的な存在の西村さんはかけがえのないゆめのボランティアさんです。

市田芳文



生活サポーター編

皆さんこんにちは! 明治大学3年の本田俊祐です。昨年リサイクル班の実習で入った宮井さんの紹介で昨年からは生活支援事業の生活サポーターとして活動しています。

径では一時ケア・ショートステイや夏のプログラムなどに参加し、色々な方と出会い、時間を共にしてきて、大学の授業では教えてもらえない経験を数多くさせていただきました。自分は大学入学当初、ただ漠然と福祉をやってみようかなあって感じではありましたが、活動を通じて自分がやるべき事! また、今後の将来においても歩むべき方向性を見出すことができました。学生サポーターとしてあと1年あまりですが、今後とも宜しくおねがいします。

ルビン君とのお風呂楽しそうですね! 本田君のほがらかな雰囲気に利用者さんもさることながら我々職員も和ませてもらっています。これからも宜しくね!



三橋清之

にんにくの視線^め

皆さんこんにちは、デイサービス担当の小坂知彦です。先日グループ旅行に行ってきました。行き先は西伊豆の温泉と「ぐりんぱ」（旧日本ランド）という遊園地でした。運転手さん付きの貸切バスで快適な旅でした。

ホテルに到着してメンバーさんと一緒に温泉に入っているとその運転手さんが入ってきました。するとその運転手さんは僕と一緒に入浴していたメンバーさんに「おつかれさまです」「湯加減はいかがですか？」などと話しかけ始めました。メンバーさんの反応は無く、沈黙が流れました。メンバーさんに代わって会話をしようとする、その運転手さんが言いました。「僕は障害を持っている人に対して特別扱いはしない。きちんと敬意をはらう。そのかわり人に迷惑を掛けていたり、不適切な行動に対してもきちんと注意する。」と自分の考えを話してくれました。

翌日、「ぐりんぱ」へ行きました。園内が空いていたこともあり、たくさんのアトラクションに乗って楽しみました。ゴーカートに乗った時のことです。あるメンバーさんの運転するゴーカートが壁にぶつかって身動きが取れなくなりました。すると係りの人がとんで来てメンバーさんに指示を出し始めました。「ハンドルを右に切って…」 「アクセルを踏んで…」 身振り、手振りを交えて一生懸命。1分ほどしてようやくゴーカートは動き出しました。

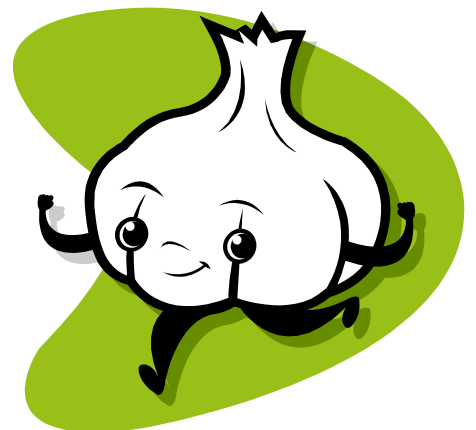
きっと、その係員の方の業務や順番を待っている来園者のことを考えるならゴーカートを押したり、運転を代わったりするのが一般的に考えられる方法だったと思うのですが、その係員は時間や労力を惜しまず、指示を出して自分の力で操縦してもらおうという決断をしたのです。お蔭様で、困難を自分の手で乗り切ったメンバーの顔には笑顔があり、その時間が、その一日が、旅行全体が本当に楽しい思い出となりました。

今回の旅行でこの様な出会いや体験をし、こんな人が地域の中にたくさんいたら皆さんにとって本当に住みやすい、暮らしやすい社会になるだろうな…と感じました。そんな社会に変えていくことがメンバーの皆さんや僕たちに与えられた一番大きな仕事なのではないかと思いました。

一緒になってどんどん街へ出て行き、たくさんの人々と
ふれあって、メンバーさんは街の中で楽しく生きる姿や笑顔を…
スタッフは地域の方々との架け橋として、
皆さんとの接し方や考え方の見本を示す…
きっとそんなことの積み重ねが

「ほんの少しの配慮や手助けがあれば障害があっても
地域で楽しく生活していけるんだ。」という意識に繋がり
地域を変えていくことになるのではないかと思います。

小坂知彦



お知らせ

社会福祉法人訪問の家『後援会』会員のお誘い

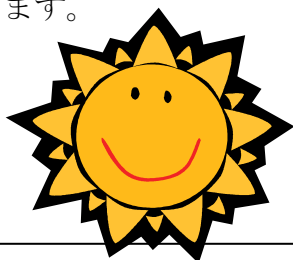
社会福祉法人『訪問の家』後援会は、法人の理念である『どんなに障害が重い人達も共に社会の中で暮らしていこう！』という活動を応援するために作られました。ご支援頂ければ幸いです。

- * 後援会費……年会費一口 2,000 円 (何口でも結構です)
- * 申し込み……申し込み用紙が冊、又は径、桂台ケアプラザの窓口に置いてあります。
- * お問い合わせ……TEL045-894-6611 fax892-3909 (册内) 【後援会会長：佐藤慧子】

バザー御礼

色づいた銀杏がゆるりと陽だまりに落ちてゆく、そんな日差しの中記念すべき第20回「愛ひかりバザール」は無事終了致しました。週末に天気が崩れるという予報に委員一同不安を隠せませんでした。当日は青空も見える穏やかな天気となり、多くの方々にご来場をいただき大盛況となりました。メンバー達の出店も大好評で各店完売となりました。バザールを支えて下さったわかくさの会を始め多くのボランティアさんに心から感謝申し上げます。保護者会も一丸となって頑張ってくれました。イベントで催された職員とメンバー達のバンド演奏やダンスは、来場者を魅了し会場を大いに沸かせてくれました。メンバー達も楽しい一日を過ごす事が出来たと思います。ご協力頂いた皆さま、本当にありがとうございました。

また、わかくさの会様よりバザー当日の収益金として13万円のご寄付を頂きました。お礼申し上げます。



売上金	1,613,737円
諸経費	573,450円
差引収益	1,040,287円

愛ひかりバザール事務局 横山

編集後記

『チーム』を広辞苑で開くと“共同で仕事をする一団の人”とある。マラソンの高橋尚子さんが見事東京国際マラソン優勝し復活を成し遂げたことは記憶に新しい。舞台裏には『チーム Q』の存在があった。彼女は監督の元を離れチームを結束し5ヶ月間のアメリカ合宿で意見の食い違いなどを克服し励ましあいその絆を強めた。高橋選手はレース終了後「玉手箱の中身は『絆』だと確信できた」と語っている。その言葉から何かからも揺るがない信頼関係が感じられる。

言いたいことはとことん言い合う、怒り、悔しくて泣き、そして腹のそこから笑う。仕事でもそうありたい、いや仕事だからそうありたい、本気ならそれでいいじゃないかそう思えてきた。

なかよしくラブではないそんな本物の絆を感じられる『チーム』を我々も目指したいものである。本気の集団『チーム Q』、次なる目標の北京オリンピックでの活躍に期待したい。

頑張れ Q ちゃん

庄司 晃洋

発行：社会福祉法人訪問の家 サポートセンター径 広報係担当：庄司晃洋
247-0034 横浜市栄区桂台中 4-5 径 045-897-1101 FAX 897-1119